

あらすじ

「きみ」が夢見ていた京都は「御伽噺の世界」ではなかった。米国で日本語を学んでいた青年が、京都で暮らし、感じたこととは——異国で暮らす青年の心の機微を、繊細に表現した物語。

作品の一部抜粋

きみにとっては今回が初めての海外旅行だ。先生に言われたように、よく分からないものに出会うのを覚悟していたけれど、こんなに身体にもこたえるのは予想できなかった。

きみは地図を持っていない。出発する前に地元の書店でマウントフジの写真で飾られたガイドブックを買ったが、今夜は旅館に置いて出かけた。ただ呆然と、気の向くままに街中を歩いてみたい。京都はチェッカーボードのように交差する直線の通りでできてから、迷う心配はまずない。

旅館の路地から大通りに出ると大勢の歩行者が見えてくる。歩道だけでなく車線も埋まっている。きみと同じようにデニムやTシャツというフツウの身なりをしている人もいれば、薄っぺらい着物、のような服を着ている人もいる。先生の話によると今夜は何かフェスティバルで、明日の日程に入っているパレードのような行事の前夜祭だそうだけれど、詳しくは分からない。

しばらく歩いてみると、町並みが徐々に変わる。低くて地味な建物が過ぎ去って、高く聳えるビルが現れてくる。交差点に着くと、きみの知らないチェーン店が理解不可能な文字で得体の知れない新商品を発表している。デパートのような建物の一面から数階分を占めるポスターがぶら下がっている。きみの知らないモデルがきみの知らないブランドの飲み物を高く掲げ、きみではない誰かに向かって美しい笑顔を見せている。ビールの広告なのか、イベントの宣伝なのか、それともまったく別の意味を伝えようとしているのか、きみには知りようがない。女性の顔の下に記された文字さえ読めればすべてが明確になるだろうが、きみが見たこともない画数の多い漢字がいくつもあるし、その間を繋ぐ仮名も、見慣れぬ字体で読みづらい。

ポスターの意味は分からないまままで終わるだろう。この旅行のあまりにも多くの謎と同じように。きみでできるのは、きみではない誰かに向けられたその笑みの横取りを楽しむことしかない。

信号が変わって、警官が笛を鳴らし、きみは周りの人とともに道路を渡っていく。身長の高さのおかげで、きみは周りの人をよく観察できる。家族連れもカップルも友達同士も。子供もいれば老人もいて、きみと同じ世代の高校生らしき者もいる。

両側の歩道に揚げ物やお酒や焼き菓子を出している屋台がみっしりと並んでいる。人の流れとともにゆっくりと前進しながらきみはそれぞれの屋台に書かれた言葉を読むとうとするが、一文字一文字を解釈するのに時間がかかる。教室ではきみが見た日本語は教科書の大きくてくっきりとした活字と、先生の丁寧な板書に限られていた。同じ文字にこれほどの多様性があるのは想像がつかなかった。

どこを見ても、きみの理解を拒む表象がある。標識といい、文字といい、イメージといい、それぞれの記号が内容にくっつくことなく、ただぼんやりときみの目の前に浮かんでいる。いきなり非識字者になったようなパニックが迫り上がってくる。しかし同時に、興奮を感じているのも確かだ。これらの表記の表面下で、きみには知らない論理が働いている。

言葉だけでなく、五感に訴えるあらゆる物事がきみの理解を逃れる。露店から漂ってくる匂いも、街を充たす喧騒のような音楽も、空気の感覚だって少し違うような気がする。長い間高熱にうなされてようやく起き上がった病人のようにたどたどしい足取りで歩きながら、眼前にある不思議に合わさらない現実をなんとか収めようとする。

今朝訪れたテンプルでも、先生がクラスのためにその光景を英語で解説してくれた。

——これはオマモリと言う。

——英語で言うオミュレット。

——ここでは、みんなオイノリをする。

——つまり日本式のプレイヤールのこと。

——本当にそうなのか。

オマモリがオミュレットになるとき、何か失われてしまうのではないか。

きみはなぜか、気になって仕方がなかった。しかし先生にその話を持ち出そうとしたら、自分の思いを適切に伝える言葉を、英語でも日本語でも、持ち合わせていないことに気づいた。

作者プロフィール

グレゴリー・ケズナジャット

1984年、米国生まれ。東京都在住。

2007年に来日。2017年に同志社大学

大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程修了。

現在、法政大学グローバル教養学部助教。



受賞コメント

京都に住んでいた頃、日本語で日記をつけ始めました。日記といっても、日常をそのまま記すと退屈なので虚実綯い交ぜで書いていましたが、それらの断片が小説の出发点になることを当時、想像しませんでした。

私にとって日本語で文章を書くことは常に摩擦が伴います。言葉はままならず、ときには意図を裏切ったりします。自分の思いを日本語で綴り始めた時、このごちなさが消え、日本語を流暢に操れる日を夢見ていましたが、書いているうちにこの感覚を却って大切にできるようになりました。いったん言語の危うさを意識した以上、その違和感とやかに付き合っていくか。この先も、言葉と真摯に向き合いながら、この問いを探究し続けたい。

選考委員と実行委員をはじめ、京都文学賞に携わった皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

あらすじ

京都で大学生活を始めた間宮は「道路」を愛好する風変りな青年。「交差点管理人」という謎めいた伝統制度を知り、その一員となった彼は、試験に苛まれつつも、歴史に埋もれた秘密を暴こうと奮闘する——京都の交差点を舞台にした奇想天外な物語。

作品の一部抜粋

四月の穏やかな陽射しは孵化を促すような優しい熱で、アスファルトの道路をじんわりと温めている。そのつるりと広がるチャコルグレイの固形物はそもそも地表に人工的に重ねられた新たな地表。地下に遥かに積み重なる茶や黄の土の層のてっぺんに位置する表層で、あるいは地を封じるように覆いかぶさる蓋とも言えるだろう。

道路の上では、朝から人や車の行き来が絶えず、活気のある騒音が小気味よく響いていた。チツチツチツという鳥の鳴き声も入り混じっているようだ。道路に街路樹が等間隔で植わっており、きつとそこか雀のような小さく無害な鳥が潜んでいるに違いない。

その道路に面するように、ゴシック建築の建物が柔らかな陽光に照らされて佇んでい。時代を感じさせる面構えながらいきいきして見えるのは、そこが若者が集う大学の校舎だからなのかもしれない。

京都市内にある立志社大学の大通りは入学ほやほやの学生たちで活気づいており、至る所で小さな集団を作っては、ピーチクパーチクさざめき合っている。まるで道路の心地良い温度が、足下から全身へと伝わり、気持ちをはかばか陽気にさせているかのようだ。

かたや新生活に心躍る彼らの脈動もまた道路に通じているようで、大通り自体も淡い反射光の中で浮き浮きしているように見える。春の魔物がそのように思わせるのだろうか。猫は好んでよく陽だまりに寝そべっているが、それは気持ち良いからだけではなく、もしかしたら地面と何らかの交信をしているのかもしれない。その深みにある「何か」を嗅ぎ取っているのかもしれない。その真実は猫に聞いてみなければ分からないが、今のところそういう話は聞いたことがない。

大通りの片隅の人の疎らなところで、道路に寝そべっている男がいた。学習机の入ったリュックサックを傍らに乱暴に打ち捨てて、大の字にうつ伏せになっている。道路に類を押し当てる、恍惚な表情を浮かべていることが、この一角の人通りを少なくしている原因なのだろう。口の開いたリュックからは、数冊の大学ノートが飛び出しており、黒の油性マーカーでぶつきら棒に「1年 間宮修馬」と書かれていた。

この陽だまりの猫のような男、間宮修馬は、大通りにあふれる雛鳥たちと同じく、先日この立志社大学に入学した新入生で、故郷の神戸を離れ京都へやってきた。顔立ちも良くも悪くもなく、体は大きくも小さくもない。よく言えばフツウ、悪く言ってもフツウ、という標準の権化のような若者ではあるが、その性質については規格外だった。

規格外というと、並外れたパワーを持った野球選手みたいなものを想像しがちだが、それとは違う。形の不揃いな訳あり野菜の方の規格外だ。言い換えると、心ある人たちが口にする「個性があるね」というアレだ。間宮修馬の何が規格外かと言うと、好みがアレだった。彼は道路というものが好きだった。あのアスファルトで覆われた、踏みつけられることが運命づけられた、あのドウロだ。釣り人が海や川に興味を抱くように、植物学者が森に心をときめかすように、彼は地を歩く者として道路という生きていくために不可分の構造物に強い関心を傾けていた。

彼は今、本来足で踏まれるべき道路に頬を当てている。何となくキリストの奇跡の光景を見ているような、ことはない。どのアングルから見ても異端者の振る舞いであることは間違いない。彼は感覚が研ぎ澄まされた頬を通して道路を感じているのだ。まるで妊婦の腹に耳を当てている時の幸福な探索心を持って、舗装されてからの歴史を想像で辿り、今現在の学生たちの足音まで齟齬のない文脈を作ろうとしていた。

彼は道路の存在意義を、人の往来や物資の輸送のためのインフラとしてだけではなく、もつと人間の情緒に寄り添う何か、と位置づけている。道行く学生たちは道路に寝そべる男を当然のように気味悪く思ったが、まさかそんな奇っ怪な考えを持った男であるとは想像が働かない。そんな異質なメンタリティがもとになって、建築学部の土木学科に籍を置いたことも、もちろん誰ひとりとして知る由もなかった。付け加えると、知る必要もなく、知る動機もなく、つまるところ「知らんがな」というやつだ。

作者プロフィール

丸本 暖（まるもと だん）

1979年、大阪府生まれ。大阪府在住。

2002年関西学院大学法学部卒業。

現在、広告会社勤務。



受賞のコメント

京都に通い始めて20年以上になります。生まれも育ちも大阪ですが、月に一度は自然と京都へ足が向いてしまいます。居心地良く感じるのは、思いを馳せやすい土地柄だからかもしれません。歴史が積み重なる街は、実に容易く過去へと誘ってくれます。考えながら、思いながら、感じながら。ただ歩くだけの所作でも、何だか感情が伴うようで嬉しい気持ちになります。

コロナ禍の今、物語や小説にどんな力があるのか考えることがあります。自由に思いを馳せる、閉じ込められた感情を引き出す、僅かでもそんな効力があればと願ってやみません。

最後に、選考に関わってくださいくださった皆様、いつも温かく迎えてくださる京都の皆様、心より御礼申し上げます。

あらすじ

十八歳の時に家を飛び出したみち江は、六五歳となった今まで、一度も両親に会っていない。両親に対する複雑な感情は、乾いた翅のようなものに覆われ赤く熟した鬼灯のように疼いている——隣人との交流を通じて一人の女性の感情の変化を丁寧に綴った物語。

作品の一部抜粋

昨夜に作って冷やしておいた白米と丸麦半々のおかゆに、梅干をあわせて食べる。夜気だけでなく邪気まで祓えるように思う。口の中で梅干の種の中の汁まで吸って、みち江の粥朝食は終わりとなった。

流して茶碗を洗っていると、隣に住む助岡さんの咳が外から聞こえてきた。路に面した走り元に居ると、前の小窓から隣近所の物音がよく聞こえる。

(助岡さん、表に出はったなあ)

みち江は、手拭いで荒く手をぬぐい、路地に出た。

助岡さんは、家を取り囲んでいる板塀の前に並べた植木鉢に水をやっていて、小菊ばかり植えている。毎年五月になると挿し芽をし、新しい株を育てる。

「そせんと、しっかり育たんのや」

と言って、八センチ程の挿し芽に、毎日とつぶりと水をやっていて。

伸びて、もう六十センチにもなっている。

「おはようございます」

「おはようさん。よんべ暑かったなあ」

助岡さんは、しゃがんだまま答えた。浴衣の衣紋を深く抜いているので、華奢な項が汗ばんでいるのまで見える。

「ほんまに。ずっと扇風機回しっぱなしでしたわ」

しゃがんで杓を短く持ち、左の手指を水にかざし土が跳ね上がらないようにして菊の根元に水やりをしている。助岡さんの手は、体に似つかわしくない節の太い、まるで男のような手だった。

植木鉢の下から薄茶色の水が流れてきた。挿し芽をするときの鹿沼土を、植木鉢の土にも混ぜ込んでいたから。

「薔が、ぎょうさん付いてきましたやん」

「せやろ。やっぱり、挿し芽せなあかんのや。ここ見とおみ。これは臍脂の菊や。茎の色ちいと赤いやろ。薔が開かんかて分かるんや」

ほくそ笑む。

「どないしても臍脂のほうが薔より付けよるなあ。白がよーけやと嬉しいんやけど」

助岡さんはみち江を見上げて、奥歯の抜けた口元を綻ばせた。みち江は、なぜ白が多いほうがいいのかを、あれこれ考えめぐらせていた。

「明日、七月十日やな。祇園さんの鉾建てが始まるえ。いっぺん一緒に見に行かへんか？」

「珍しいこと言わはるねえ。それって面白いですか」

「あんたはん、見たことないのんか？ 鉾の材を縄で締める勢いちゅうんは、こっちも肝を締上げられるでえ」

助岡さんは、鳥の首を絞めるような手つきをした。

定年退職したのだから鉾引く巡行の日でも見に行くことができるみち江だが、行かすじまいだ。つまり、祇園祭の人数の多いのは苦手だった。

「鉾建てって混雑するんでしょう。遠巻きに見るだけですか？」

「ちゃうちゃう、周りに取り囲みが居るだけや。見やすいところに連れたるわ」

助岡さんは立ち上がると、貝ノ口結びの帯を、肩を揺らしながら締めなおした。

作者プロフィール

家野 未知代（いへの みちよ）

1948年、奈良県生まれ。京都市在住。

1969年、華頂短期大学社会福祉科卒業。

元地方公務員。長年、児童福祉、社会福祉に携わる。

2008年、第23回家の光童話賞佳作。

2017年、第5回泉大津市オリアム随筆賞

佳作。文章サークル「櫻の会」会員。



受賞のコメント

一昨年、「京都文学賞」が創設されたとき、小躍りして喜びました。地元京都に住んで文章修行をしている者にとって、特別の大きな目標が出来たからです。第一回目は作品が間に合わないし、「私なんか出しても、どうせだめだろう」と、諦めたりしました。

でも、日々の暮らしを必死に生きている女性を励ます小説を書いてみたいという思いは強く、挑戦してみました。それは、私が今まで生きてきた中で大切に貯えていたものを、一枚の布に織り上げて行くような作業でした。

その作品で賞を頂けたのは、女性への応援歌に対するエールだと感じています。

受賞は至高の喜びです。選考等に係わって下さった全ての皆様、心よりお礼を申し上げます。

あらすじ

文学賞の受賞パーティーで、一人の作家が十年前のある日のことを思い返していた。夢に破れた青年。ミュージシャン志望の男。ある決心をした若者。その父親。ギターケースを持つ男。京都・鴨川で彼らの人生が交差するとき、奇跡の物語は動き出す。

### 作品の一部抜粋

「ああ、藤井さん！」  
何年かぶりに再会した先生は、あの頃となんら変わらない穏やかな笑顔でわたしを迎えた。くつきりとした大きな瞳が優しげに垂れに垂れる様子は、まるでナマケモノが笑った顔のようで。先生その顔を見た途端、思わず微笑んでしまった。  
「一色先生、本当におめでとございます」

「そう」と、先生の瞳は鉛筆で書いたみたいに細くなった。  
自然体と一緒にいると落ち着く先生の人柄は変わっておらず、ホッとさせる。だが、先生の周りに群がる多くの人の存在に、月日が流れる速さを感じる。先生にはもう、売れるかどうか悩んでいたあの頃の初々しさはない。初々しさはやがて貫禄と化し、日本を代表する一流作家の階段を登りはじめたのだ。だから、受賞を知ったとき、素直に喜びながらも心のどこかで、先生がわたしからどんどん遠くなっていくのではないかと不安感を覚えていた。わたしのことなど頭から消え去り、忘れ去られてしまおうのではないかと。だから、ちょうど一ヶ月ほど前、先生から受賞記念パーティーの招待状が届いたときには、飛び上がって喜んだ。

そして、今日。晴天の空の下、ホテルで華やかに幕を上げたパーティーには、わたしを含め、出版関係者や友人など、先生と関わりがあった多くの人が受賞を祝った。その数の多さに驚く。どうやら、受賞記念とは名ばかりで、実際は交流会のようなものだろう。だから、招待された人のみならず、招待客の知り合いまでも、興味があれば参加することができる。先生がいうに、自由で楽しい会にしたかったらしい。遅れてくる人もかなりいるので、今よりもっと賑やかになりますよ、先生は辺りを見渡しなが嬉しそうに呟いた。

ボーイから薄桃色のシャンパンを受け取る。シャンデリアにかざすと、宝石のように煌き、夏だけど、春の香りが押し寄せてくる。美しい色ですね、と言うと、妻が好きな色なんでねえ、と照れ臭そうに顔を赤らめながら遠くを眺める。その目線の先には、桜色の着物を身にまとい、参加者に笑顔で話しかける先生の奥さんの姿があった。こほん、と咳払いをし、沈黙を打ち破る。

「それより藤井さん、仕事の方はどうですか」

先生が思い出したように言った。  
「ええ、まあ、順調といえますか。大変なことのほうが多いですけど、好きな仕事なので充実しています」

それから、今の仕事の現状とか大変だったこととか、事細かに先生に話す。いつか出版社を舞台にした小説も書いてみたいですね、と天井を見上げて言う先生の声を聞いて、嬉しくなる。思わず、鼻の頭を二、三度擦り、照れ臭くて俯いてしまう。

「先生は？」

そう聞き返したとき、しまった、と思った。先生は、今活躍されていて、現状を聞くまでもない。失礼なことを言ってしまったと慌てて訂正する。

「……えっと、先生はどうして作家になろうと思われたのですか」

これは、わたしがずっと聞いてみたかったことの一つだ。そりゃあ、本が好きだったから、とかある作家に憧れていたから、とか大体の予想はつく。でも、先生の過去の話は聞いたことがない。先生のデビューは二十代後半で、特別早いというわけでもなく、つまり、先生が大学を卒業してから空白の期間があったということだ。

「先生が作家の夢を諦めなかった原動力とはなんですか」

その期間に何があったのか、なぜ諦めずに作家を目指せたのか、先生の原動力となったのは何なのか。そんな話、わたしが担当をしていたころは一度もしたことがなかった。だから、興味本位で一度聞いてみたかったのだ。順調そうに見える先生の本質にあるであろう、教習なドラマを。

先生は、伏せ目がちにわたしを見た後、思い出すなあ、と大袈裟に言った。

「十年前の今日の日のことを」

先生の表情が緩む。昔を思い出し、懐かしむように遠くを眺めた。賑やかな会場が、わたしただだけの空間となった瞬間だった。いつのまにか、先生の周りにはわたしだけしかいなかった。そのタイミングを見計らってか、長い沈黙の後、先生が口を開ける。  
「とある作家の運命を変えた日の話です」

先生の瞳をじっと見つめる。  
「そう、全ての始まりは、階段を一段踏み外したことでした……」

### 作者プロフィール

足立 真奈（あだち まな）

京都府福知山市在住。

福知山市立夜久野中学校3年。

2019年、第7回京都府小論文グランプリ

最優秀賞。同年、全国中学生人権作文コンテスト

京都大会 京都府人権擁護委員連合会長賞。同年、

全国中学生人権作文コンテスト中央大会 法務省

人権擁護局長賞。



### 受賞のコメント

この度は、京都文学賞中高生部門の最優秀賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。京都という街は、どこか不思議であたたかく、私にとって憧れの地です。今回は、そんな京都を舞台として、時代を超えた人と人とのつながりの素晴らしさが感じられるような物語を魂を込めて描きました。皆さんに読んでいただけることを、大変嬉しく思います。

最後に、応募のきっかけをくださった担任の先生、いつも応援してくれた両親、そして、京都文学賞に関わるすべてのの方々に感謝を申し上げます。本当に、ありがとうございます。

あらすじ

将来の夢もなく、それでも勉強を強要される生活に疲れ切った少年ひなたは、余命宣告を受けた少女こかげと出会う——人生に絶望した少年と少女のひと夏の交流を描いた切ない恋愛劇。

作品の二部抜粋

雨が止み、街灯の光が水溜りに跳ね返されている情景はなんとも美しかった。病院の前、男の乗った車が来るまでずっと、病室でのことを考えていた。死を宣告された彼女のことと以前読んだ小説のある場面のこと。

その小説のヒロインは病弱であった。生まれながらの病で余命僅か。ヒロインは主人公にこの話をするとき悲しくて、それでも主人公にそれを見せないために泣きながらも笑った。それを読んで目が潤んだ時も、病室で彼女が笑った時も湧き出た感情は嫉妬だった。

死ぬのを怖がって、死にたくないと思願して、醜く足掻いてそれが人間だ。そんな人を僕は知っている。それは僕の身に染みていた。それなのにたった一つ年上の彼女は、死を知っても尚、笑っていられるほどに強い。それがどうも気に食わない。

しかし、本とは違い實際を目にして、彼女には嫉妬以外にも何かを感じていた気がする。

それより、病院に連れてきて病気の娘に会わせたい男の意図を読めない。僕が嫌いであろう場所に連れてくる嫌がらせか、その他に何かあるのか。

どうあってもこのまま家に帰れば、男との関係は終り、どうせ僕はまた日常に戻る。今日のこととはただの過去として流れていき馬鹿なことをした恥ずかしい思い出としていつか思い出す。人間はそうやって全ての出来事を記憶へと変換していく。今という記録を常に更新して、いい過去として悪いメモリとして人生を変えたきっかけとして振り返り、消去し大事にする。そうやって何度も同じように繰り返し。もうそれでもいいのかもしれない。

「本当はどう思ったんだ？」

「何がですか？」

「こかげのこと、本当はなんて言おうとしたんだ」

男から彼女の容態を聞いた時に湧き起こったこの感情を僕は話すか迷っていた。それでも微妙な空気に耐えられず、僕は話すために男から目を逸らし窓の外を見た。空気を讀んだのだ。きっと僕は男が予想した通りに答えるだろう。

「羨ましいなって」

彼女の病気ではなくて、その死が羨ましいなと思った。男は怒ることもなく少し溜めて、「そうか」とだけ言った。ここで男が怒ってくれたなら僕は今よりずっとまともな人間になれたかもしれない。

「少し話そうか」

車は駅近くの喫茶店に停まり、男はそう言うのは中に入っていた。

「死生観って、分かるな？お前にとつての、生と死とは何か。当てるやろうか」

突然始まった話題は、僕を交えることなく淡々と男の下で問題提起され、回答される。「楽しくないがやるべきことに溢れていて、毎日苦しいが時々幸せなことも訪れる。お前にとつての生きることは死ぬに死ねない、まだ死んでないことを言う。なら、お前にとつての死はなにか。それは、救いだ。生きる苦しみからの離脱、解放。そんなところだろ」

全てが正解ではなかったが、間違いでもなかった。特に、死が救いだという部分は、実に的を射ている。

僕は、死ぬことに憧れている。

作者プロフィール

大鹿 日向（おおしか ひゅうが）

京都市在住。

京都府立洛西高等学校3年。



受賞のコメント

どこかの誰かであり、大多数の一般人である自分が思い、感じていることを伝えた気持ち一心で書きました。

この物語を読んだ時、本作の主人公の考え方や行動を人々はどう捉えるのか想像することが楽しかったです。共感する人もいれば怒る人もいて、哀れむ人もいれば一笑する人もいます。当然、全く関心を持たない人もいます。だから、ただこんな人もいるのだと知ってもらえれば嬉しいと思います。

また、自分が書いた物語を誰かに認めてもらえることはとても喜ばしいことで、自信となります。ありがとうございます。